

大鹿スケッチ

2010
長月
前志満くみ
第18号

大鹿HeatBeat

第15回～大鹿の人々～

紙谷 正 さん (84)



季節を通じて原風景が楽しめる紙谷さんご自慢の自宅裏の見晴らしスポットからは今、だんだんと黄金に色づきつつある堂垣外(どうがいと)の田園地帯を見渡すことができます。8月30日、秋蚕の飼育が始まりました。お盆が過ぎて間もなく鹿ちゃん襲撃で桑畑が3分の1全滅してしまったため、お蚕様の数も4分の1減らすことになりました。「動物愛護」を掲げる紙谷さんの畑には、山の伝達網でもあるかのごとく様々な「お山の友達」が集うのです。少し迷惑そうにしながらも紙谷さんは寛容です。

大鹿の御長老の皆さんはよく「還元」という言葉を使われるように感じています。田植えのときには、機械が入らない隅に手植で鳥の食糧分を植えるのが習わしです。最近の食害は目に余るものがあるように感じますが、里山に人が少なくなった分、山の命が栄える案外、自然な流れなのかもしれません。紙谷さんの稲刈りは秋蚕を送り出した20日過ぎ、それに備えて田んぼの畦波を外していきます。ただ黙々と…



んだと改めて感じることもできます。上等もそうでないものもそんなものはなく、食べ物もちろんすべてのもは尊いものなんだと生活の中で自然に感じていたと思います。



今年雨が少ない。だからたまーに雨が降ってくるとその存在の大きさを実感する。山に露、さらに深く、山の気がいっそう匂い立つ。濡れた緑。姿の見えない鳥が木立の間から歌う。ひんやりと吹いた風。大地を踏みしめる。土の香り。深呼吸をしたときの充足感は雨の降った朝が一番。動物や植物にも相当しない「エネルギー」そのものが行きかう場所。それが「地脈」。

大鹿村釜沢(かまっさわ)は村内最遠の集落で、標高1000m級、南アルプスの山並みが間近に臨め、アジアの国々を旅してきた人たちは「釜沢」を「日本のチベット」とたとえる人も少なくない。また村内の他集落と比較しても特色のある文化風習がみられる地域。かつては30戸を超えた時代もあったが、現在は13戸までに過疎がすすんでいる。しかし国内外からその土地の魅力に惹かれ移住を果たす人が多いというのも実情である。今年の5月に大阪から移住してきた谷口昇さん(40)文子(あやこ)さん(35)夫妻もまた、そんな釜沢の「地脈」に魅了された人たちと言えよう。



7月下旬から村内在住の天然石のアクセサリデザイナー本間敬二さん(30)の作品を展示販売させていただいています。本間さんは7年前に関西より移住を果たし、大鹿の豊かな自然環境の下で得られる心身の充実感、インスピレーションを大切にオーガニックライフを実践しながら天然石の買い付け、デザイン、制作、販売まで全工程を手掛けています。色彩豊かで、涼しげな作品の数々はバクティのHPからもご覧いただけます。www.bhakti.jp

「大鹿村に住みたいというよりは釜沢に住みたい」と話すのは東大阪出身の「のびさん」こと谷口昇さん。「山の生活がこんなに楽しいなんて」とイキキとお話して下さるのは福岡県出身で海っ子育ち。奥さまの文子さん。お二人は2005年から村内に引っ越した友人を訪ね2回は大鹿村を行き来していたといい、今回の移住も自然な流れだったようです。のびさんはマッサージ師、文子さんはコピーライターのお仕事に長年携わっていたということで



これからの展開が楽しみでもあります。現在は、お住まいの整備、畑づくり、地域で頼まれた仕事を請け負いながら「釜沢生活」を満喫されているご様子。のびさんはS45年生まれ。生駒山のふもとの下町、東大阪で育ちます。自然の中で遊んだり、おじいちゃんについて田んぼや、畑のお手伝いをして過ごしたのが一番の思い出。しかしそんなどかな風景はバブル期に一転します。知らぬ間に畑だったところにビルが立ち並び、緑が消え、人もなくなっていくのに衝撃を覚えたといいます。それまで土地と人を結びつけてきた田畑が無くなることで下町の人情も薄れていったのでしょう。その後、大学を卒業、アルバイトをしながらアジア各地を旅する中で、出身地、東大阪で起こったことと再び遭遇することになります。それはインド北部のパラナシでのこと・・・以前は貧しくとも地域のネットワークで活気づいていた街が経済産業の流入によって、みるみるとコンクリートで街も人も無機質になっていく様子。さしづめミハヤエル・エンデの「モモ」の世界の様に。世界各地で守られてきたものが失われていくのか、守るべきものが移り変わりつつあるのか…どちらにせよのびさんにとって幼少時代、自然の中で遊んだこと、田畑を耕したことが「生きる」という実感につながっていたからこそ釜沢に希望を見出されたのではと思います。釜沢は不思議な魅力があるとのびさんは語ります。「山があって畑があって元気になる。自然と人間の距離感がいいのかもしれない。そんな環境に育った人もはだかで心地いい。」田舎にアコがれて都心から移り住む方の中にはご近所とのやり取りがおっくうで出てってしまう方も少なくないと聴きますが、谷口さん夫妻は、人と人が自然に支え合って生活していること、またそこに加わることがうれしくて仕方がないといいます。支えて、支えられて…「恩返しをしたい！」そんな日常の何気ない心の交流から生まれる「感謝の気持ち」こそがこれからの時代の下支えになっていけばきっと未来は明るいのではないのでしょうか。



ご近所の方との語らいもまた楽しい。土のこと。山のこと。風のこと。



南アルプスに見守られているような感覚。山々に手を振れば応えてくれそうな・・・

まんまる農園のマキさんから「食」のこと。寄せられたフックスをそのまま記載させていただきます。植物原料100%のケーキを私は「すこやかケーキ」とよんでいます。リッチな食材のおやつは特別なき、ハレのときに時々頂くもの、私のおやつは普段着のバクバクたっぶり食べられるおやつと想っています。だから体にもココロにもやさしいものを、食べ過ぎてしまっても安心できるものをと想っています。卵や牛乳を使わず「ほからかケーキ」シリーズもあって、こちらを食べても卵や牛乳を食べてもおいしいりともおいしーんだと改めて感じることもできます。上等もそうでないものもそんなものはなく、食べ物もちろんすべてのもは尊いものなんだと生活の中で自然に感じていたと思います。